
新生大日本帝国大戦記

一条機龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新生大日本帝国大戦記

【Nコード】

N2342Z

【作者名】

一条機龍

【あらすじ】

偶発的な交通事故によって死んだはずの雑風大悟とはある歴史を辿る世界に転生してしまった。その世界は大日本帝国が勝利し、自らはあの大東亜戦争で大日本帝国を勝利へと導いた第一独立機動艦隊の司令長官となっていた。そして世界が再び混沌とする戦争になる時、第一独立機動艦隊と言う宝剣が抜かれる……。

それとこの作品は人生で初めての架空戦記です。色々指摘してくれたら嬉しいです。更新速度は3日に一話です。

第一話 プロローグ

歴史は流れの止まる事の無い一つの大河である。

その流れの中には事実と同じ歴史を歩んだ世界が存在するが、事実通りの歴史とは違う世界も大河の流れの中に存在する。

つまりこの物語の世界は大きく違っていた。そうこの第二の地球の世界がこの物語のステージである。

そしてこの第二の地球で事実とは全く異なった歩みを歩んだ日本でこの物語は始まる。

さあ、共に見届けよう。第二の世界に君臨した青年とその仲間が織りなす物語を……。

第一話 プロローグ（後書き）

初めまして一条機龍と申します。さて今回、この「小説家になるう」で初めての小説を投稿しました。多少、不慣れな所等はありませんがどうか温かい目で見守って下さい。

第二話 終わりの始まり（前書き）

本日二話目の投稿。

第二話 終わりの始まり

20XX年12月8日 日本国東京都秋葉原

日本国最大の電器街と呼ばれている秋葉原に初雪が降った。シンと降る初雪に人は色々な思いを抱いているだろう。

ここにとある思いを抱いている青年が居た。彼の名はなぎかせ だいご薙風大悟、その彼の右手には花束とケーキの入った箱を持っていた。

「ようやく買えたよ。ったく……」

薙風は対応の遅い定員に内心愚痴りながらも初雪が降る秋葉原を歩いていた。

そして薙風は郊外に続く電車を乗り継ぎ、そこからまた歩くとある場所に着いた。

そこは誰からの目にも止まらない場所でお墓が一つ、ポツンと立っていた。

そして薙風は持ってきた花束とケーキの箱を置き、墓に眠っている人に語りかけた。

「また来たよ。今度はお前が好きだったカトレアの花とショートケーキを持ってきたぞ。なあ、何が在ろうとお前の事は片時も忘れていないよみか魅華」

このお墓に眠っている人は薙風にとっては最愛にして最高のパー

トナーそして彼の許嫁だった西條魅華である。

詳しく説明すると二人で結婚式後の新婚旅行のため呉に寄っていた。そこで中国共産党党员による自爆テロに巻き込まれ、彼自身は多少のかすり傷で済んだが彼女はそういかなかった。なぜなら爆風で飛んできた破片が彼女の心臓部付近にまで突き刺さると言う重体だった。

～～回想～～

「み、魅華！？すっかりしろ！おいッ！」

薙風は自らの傷の痛みを忘れ、重体の西條を抱き起こそうとした。

「うっ………大悟……」

彼女の体は爆弾の破片で至る所から血が出ており、意識が朦朧としている。

「死ぬんじゃないぞ！もう少しで助けが来る！」

だが、西條は自分の体がもう持たないと自分自身が一番分かっていた。だから最後の力を振り絞って薙風に言った。

「大……悟………生きて……私の分まで………」

そう言つとゆっくりと瞼を閉じた。

「み、魅華？嘘だろ………何かの間違いだろ………おいッ！！返事してくれ！！うわああああっつ！！！！！！」

薙風は何よりも代え難い大切なたった一人の彼女を失った。魅華との思い出が走馬灯のように次々浮かんではすぐに消えての繰り返しだった。

〳〳回想終了〳〳

「俺はあの時誓ったんだ。魅華の様な人を誰一人として生ませない。だから俺は海上自衛隊に身を寄せた。今では艦隊司令にまで出世したんだぜ。この雄姿を魅華にも見せたかった……」

薙風は思わず涙が出ていた。あの時の状況が脳内に忠実に再現されたからである。

「じゃあな。また来るぜ」

薙風は涙を拭きながらこの場から離れ、帰宅しようとして道中を歩いていたその時だった。

キキキイッツーーーッ！！スゴオオーーーン！！

運転を誤ったトラックが薙風を跳ね飛ばし、そのまま逃走した。辺りは血だらけの状態である。

「…魅華…もうすぐお前の所に…行ける…」

意識が消えかかっている中、最愛の女性の元に行ける、その事を考えながら薙風は静かに目を閉じた。

……だが、これは終わりでは無い。これこそが真の物語の序曲で

ある。

第二話 終わりの始まり（後書き）

ご意見・ご感想をよろしくお願いします。

第三話 別世界への転生（前書き）

ようやく完成した……自分が納得するのが出来るまで書いては消しての繰り返しでしたので……取り敢えずどうぞ。

第三話 別世界への転生

「ち……か……の……」

……何だ？声がするぞ？

雑風は何処からか分からない所から声が聞こえてくることに疑問を感じた。それに声を聞くとどうやら女性の声らしい。

雑風は重い瞼をゆっくりと上げ始めた。ボンヤリする視界の中で女性が一人居た。

「大丈夫ですか長官殿？」

女性の視線が雑風に対して向けられる。

長官？それにどういう事だ？

雑風は混乱した。その混乱に拍車をかけたのが低くも無く高くも無い天井とその女性が来ている服である。

確かあの時俺は外に居たはず。それにその服は？

彼は見覚えがあった。かつて世界に誇れる海軍力を有した日本海軍の海軍服にそっくりだからである。

埒が明かないと彼は重い体を立たせようとした。

「長官殿！？」

女性は雑風が立つのに気付いたのか雑風の肩に自分の肩を掛けてくれたおかげで何とか立てた。

そして周囲を見回し、次に自分の身体を目の前に有った鏡で見た。少しだが自分の背が伸びている感じがした。

「どうしたのですか長官？」

女性は不審な行動をする自分に聞いてきた。

何と言ったらいいのだろうか？取り敢えず何か言い訳をしなくては。

「済まないが君は誰なのだ？」

女性は衝撃を受けたかのように少しよろめくと言った。

「何を言っていますか？私はこの機動航空戦艦『越後』の艦長、芹沢綾香海軍大佐ですよ。どうしたのですか長官？一体？」

機動航空戦艦？何を言っている？航空戦艦どころか戦艦すら存在しないのに。どういう事だ？

また混乱したがとにかく即席で考えた言い訳をするしかなかった。

「……分からないんだ。それに自分の名前は覚えているのだが官職などが分からないのだ。それに一体自分の身に何があったのだ？済まないが教えてくれないか？」

これを聞いた芹沢は答えた。

「あなたはこの第一独立機動艦隊を率いている司令長官であるのです。そして長官、覚えていないのですか？長官は勤務中に急に倒れてしまったのです。それでこの長官室で休ませていたのです」

第一独立機動艦隊？そんな組織は海上自衛隊には存在しない……いや待て。もしこの世界は自分が居た世界とは違う世界だったら？それなら話の辻褄が合うのだが……もしかしたら自分は全く別の世界ワールドに転生してしまったかもしれない。

こんな風に考えていた薙風に芹沢は言った。

「取り敢えず長官殿。今はゆっくり休んでいて下さい。何よりも健康が一番ですから」

そう言うと芹沢は敬礼して部屋から出て行った。

そこから薙風は何が起こったか分からなかった。意識が戻ったら全く異なった世界に飛ばされた揚句に自分は何事にも代えがたいような重要な役職に就いている。

取り敢えず自分の部屋（長官室）に置いてあった一冊の本を取って見た。ちなみにタイトルは『大東亜戦争から現代まで』である。

薙風は最初からページに喰らいつき、次々とページを捲っていった。そしてあつという間に読み終えたが、薙風にとっては衝撃が大きかった。

この本に書かれていった事を重要な点だけ抜き取るところなる。

事実とは全く違う道を日本は進んでおりそれどころかナチスが政権を取れなかったため共和制を敷いているドイツ連邦共和国、日英同盟が継続しているイギリス、共同の道を進もうと同盟を組んだフランス、そしてアメリカを脅威と考えている中華民国との間で結ばれた軍事同盟俗に言う五カ国軍事同盟が締結されていた。

そして1941年12月8日、日本海軍第一機動艦隊、第二機動艦隊がハワイ真珠湾に航空攻撃、その後息をもつかせぬ早さで三個師団を上陸させ、そして占領したのだ。その際に脱出しようとしたペンシルバニア型二隻を特殊潜水艇の魚雷攻撃によって湾の出口で撃沈、それが原因で脱出できず戦艦八隻（コロラド型三隻、ニューメキシコ型三隻、テネシー型二隻）、事実とは違い巡洋戦艦として竣工しているレキシントン型巡洋戦艦六隻、重巡二隻（ポートルランド型）、軽巡二隻（セントルイス型）、駆逐艦一六隻を捕獲することに成功した。

ちなみにウィリアム・F・ハルゼー提督率いる機動艦隊は第二機動艦隊の航空攻撃で空母を除く全艦艇が撃沈され、さらに第三水雷戦隊が機動艦隊を包囲したためさすがのハルゼー提督も降伏せざるを得なかった。

同時に英仏独三カ国連合艦隊がカリブ海へ奇襲攻撃を仕掛けた為、バハマ諸島の各基地は殲滅され、さらに米加国境からランカスター、モスキート、He277が工業地帯への戦略爆撃を仕掛けたため各地の工場は軒並みやられた。

さらに日英陸軍はアメリカ極東拠点フィリピンへの上陸作戦を敢行。日本海軍第二艦隊とイギリス極東艦隊が上陸前に艦砲射撃を行い、その際にアメリカ極東艦隊の艦艇を航空攻撃で八割撃沈、残りの二割は日本海軍の誇る第二水雷戦隊一撃必殺の酸素魚雷で沈めた。

フィリピンをめぐる戦いは圧倒的に日英軍優勢だった。アメリカ陸軍のM3スチュアート軽戦車やM3リー・グラント中戦車は本来ならまだ存在しないはずのイギリス陸軍のコメット巡航戦車、チャーチル歩兵戦車、日本陸軍の事実で言うなら五式中戦車並の性能を誇る百式中戦車、88mm戦車砲を搭載した百式重戦車によって蹴散らかされ、アメリカ軍の兵士は恐れ戦いた。そのため僅か一ヶ月でフィリピンは陥落した。事実では出来なかったマッカーサー將軍を捕虜にしたためである。

ちなみにハワイ占領と同時にミッドウェー諸島、マリアナ諸島、アリューシャン諸島、ジョンストン島を占領。これにより太平洋からアメリカが有する軍事基地はほぼ消滅したも同じだった。

大西洋では英仏独三カ国連合艦隊とアメリカ大西洋艦隊の間で激闘が繰り広げられた。結果はイギリス海軍の戦艦ロイヤル・オーク、バラム、巡洋戦艦レナウン、空母イーグル撃沈の代わりにアメリカ海軍の最新鋭戦艦ノースカロライナ、ワシントン、空母レンジャー、ラングレー、ブロックアイランドを撃沈する等、大接戦だった。

1942年6月、真珠湾で捕獲した艦艇を大改装、さらに改大型戦艦として越後型超弩級戦艦四隻を中心とする機動艦隊：それが第一独立機動艦隊である。この艦隊は連合艦隊では無く軍令部直属の機動艦隊であり、つまり連合艦隊が独立機動艦隊の艦艇の引き抜きは不可能でさらに独立機動艦隊はある程度独立した行動を取ることが許されているため、大きなフリーハンドである。

艦隊編成（主力艦艇のみ）は以下の通り。

艦隊旗艦：『越後』えいご

- 高速戦艦：『備前』
『備中』
『備後』
『出羽』
『羽前』
『羽後』
『安芸』
『出雲』
『石見』
『筑前』
『筑後』
『九重』
『普賢』
『蔵王』
『磐梯』
『羊蹄』
『乗鞍』
『雲早』
航空母艦：『鋭龍』
『剣龍』
『盾龍』
『防龍』
『伊吹』
『鞍馬』
『九頭竜』
『神野瀬』

と言つ感じになっている。

第一独立機動艦隊の初陣はフェニックス諸島占領作戦及び中型空

母一隻、護衛空母四隻からなる小規模機動艦隊の撃滅である。

同年7月、ハワイ真珠湾より第一独立機動艦隊が出港し、最初に航空攻撃でフェニックス諸島に点在する航空基地や基地を攻撃、これで敵機動艦隊をおびき出させようとした。作戦は見事に成功し、敵空母からせつせと航空機が出撃してゆく中、別ルートから接近した航空隊の奇襲によって次々と航空機に誘爆、そして僅か20分で五隻の空母を撃沈した。残った艦艇は一部を除いて航空攻撃で空母共々撃沈され、残った艦艇は命からがらでアメリカの領海へと逃げて行った。この後、フェニックス諸島は余裕のあるイギリス軍が占領した。

同じ頃、欧州では英仏独陸軍とソ連軍が東欧を巡って激しい陸上戦を繰り広げていた。ソ連軍自慢のT-34、KV-1、KV-2に対してドイツ陸軍のパンター中戦車、ティーガー？重戦車、イギリス陸軍のコメット巡航戦車、チャーチル歩兵戦車が特にワルシャワで激戦を繰り広げていた。結果は地上戦に加えて空中戦で制した英仏独三カ国連合軍が勝利、東欧諸国を赤軍の手から守った。

それどころか逆にポーランド方面、イラク方面から合計80万の兵力、戦車3500輜、航空機6500機、艦艇110隻がソ連に対して総反撃に出た。ワルシャワで大損害を受けたソ連はこの攻撃を防ぎきれずモスクワまで後600キロと言う所まで追い込まれた。

ソ連軍は最後の望みとして満州への総攻撃を仕掛けた。だが、これですら日本陸軍及び中国陸軍、満州陸軍の万全の体制での反撃によって侵攻した極東陸軍50万のうち僅か二週間の反撃で五分の一に当たる戦死者2万5000名、死傷者6万名、捕虜2万5000名、対して日中満三カ国連合軍は戦死者8700名、死傷者1万1000名、捕虜無しと言うソ連の歴史的な大敗北に終わった。

1943年4月、日本海軍はアメリカ建国史上初の本土空襲のため第一独立機動艦隊を中心に第一機動艦隊、第二機動艦隊がロサンゼルス、サンフランシスコ、サンディエゴ、シアトルへの航空攻撃を敢行した。その際に空襲予定の場所を中心に強力な電波で大胆にも空襲宣言を行った。空襲の結果、それぞれに点在する航空基地や軍港を軒並み破壊した。

同年7月、サンディエゴ沖に再建した機動艦隊が集結、そしてハワイへと進路を取った。戦力としてはサウスダゴタ型戦艦四隻、アイオワ型戦艦四隻、エセックス型空母八隻、インディペンデンス型空母四隻、ニュー・オーリンズ型重巡四隻、アトランタ型軽巡六隻、フレッチャー型駆逐艦二十四隻と大規模になっていた。代償として大西洋艦隊の戦力は大幅に減少していた。

この機動艦隊出港は哨戒中の潜水艦によってハワイの機動艦隊に到達され、停泊していた第一独立機動艦隊、第一機動艦隊、第二機動艦隊が出港し、ハワイ内の航空基地からは爆雷装の零式陸攻（事実の一式陸攻）四三型、最新の三型陸攻一型、天山一型、彗星三二型、直掩の零戦五四型、最新鋭の烈風二一型、紫電改二二型、陣風二二型が出撃した。

対するアメリカ機動艦隊は十二隻の空母から最新のF6Fヘルキヤット、SB2Cヘルダイバー、TBFアベンジャーが出撃していた。

まず零戦五四型、烈風二一型とF6Fとの空中戦ではF6Fの重装な機体を両機に搭載されている25mm機関砲によって次々と撃ち落としていったが、逆に脅威的な旋回性の代わりに装甲を多少削ったため12.7mm機関銃の一斉射で一瞬にして火を噴くと激戦

だった。

次に攻撃隊だが、最初に攻撃を仕掛けたのは後手に回ったはずの日本軍だった。だが、アメリカ軍機動艦隊はアトランタ型防空巡洋艦六隻が空母を中心に陣取り圧倒的な対空砲火を浴びせた。そのため何とかアトランタ型四隻、インディペンデンス型二隻、フレッチャー型五隻を撃沈、エセックス型六隻を飛行甲板を損傷させた代わりに出撃した機数の一割に及ぶ四十九機が撃ち落とされた。

次にアメリカの攻撃隊だが、これに関してはほとんど制空戦闘機隊の攻撃で撃ち落とされ、残った機体も各艦艇が持てる全ての対空火器を撃ち上げた為、全く照準を付けずに爆弾や魚雷を投下していたので艦隊は無傷だった。

航空攻撃で空母に少なくない損傷を加えられたアメリカ海軍は戦艦群を艦隊から切り離して、夜戦を仕掛けようと艦隊から離れた。

そして日にちが代わる時、日本軍の哨戒の隙をついてアメリカ軍の戦艦が夜襲を仕掛けてきた。しかも運の悪い事に米戦艦が向かって行くのは第二機動艦隊で、手持ちの戦艦は対空戦闘に特化改装した金剛型防空戦艦四隻のみであるためかなり不利な状況であるが、幸いなのは改装によって金剛型の速度が33ノットに向上した事と第三水雷戦隊が付いていた事である。

結果はサウスダゴタ型四隻を撃沈したものの第三水雷戦隊の重巡青葉、衣笠、駆逐艦三隻が沈み、金剛型全艦が三か月のドック入りと言っほどの大損害を被った。

残ったアイオワ型四隻は再び日本軍の哨戒の隙をついて機動艦隊と合流しようとしたが、その機動艦隊は戦艦群が離れた隙に第一独

立機動艦隊の高速戦艦群によって全艦艇が拿捕されると言う事態が起こつたのだ。皮肉にも自分達を拿捕しにきたのはかつての友軍の艦艇である事で、この状況を知つたアイオワ型四隻は最初こそ撤退しようと考えていたが、自分達の戦艦よりもはるかに巨大な戦艦がやって来た事とその艦砲射撃によって降伏せざるを得なかつた。

日本側は第二次ハワイ沖海戦と大々的に発表、逆にアメリカでは今まで負け続きでしかも今回の海戦では自分達の犠牲は大規模なものに対し、日本側に与えた損害は重巡二隻、駆逐艦三隻撃沈、戦艦四隻中破、航空機四十九機のみである。

そのためより一層アメリカ国民の間で反戦デモや大統領辞職を訴えるデモの規模が大きくなり、それに拍車をかけたのがルーズベルト政権が社会主義国家であるはずのソ連に対して武器を輸出する事が発覚すると本来味方であるはずの民主党からも議会で盛んに辞職を訴え、そしてついにルーズベルト大統領は脳梗塞で倒れ、そのまゝ息を引き取ってしまった。

そのため副大統領であるハリー・S・トルーマンが大統領に就任するとすぐに五カ国軍事同盟と講和条約を呼びかけ、軍事同盟側はこれを承諾、そして1943年11月1日スイスの首都ジュネーヴにおいてジュネーヴ講和条約が締結。これによりアメリカを含め六カ国軍事同盟となつてソ連とイタリアに対し宣戦布告したのだった。

早速、アメリカ軍は欧州に軍を派遣し英仏独陸軍と共にイタリアへと進行した。対するイタリア軍は事実よりはマシでソ連より無償で輸入した燃料によってイタリア海軍自慢のヴィットリオ・ヴェネト型戦艦やアクイラ型空母が地中海で大暴れしていた。

それに対して欧州へと派遣させた第一独立機動艦隊がジブラルタ

ル方面から地中海へと進行し、イギリス、フランス地中海艦隊と共に地中海のイタリア軍勢力を駆逐すべく、シチリア島、クレタ島攻略作戦を発動させた。

攻略にあたって障害となるイタリア艦隊に対しては徹底的な航空攻撃を敢行、もちろんイタリア空軍も反撃しようとしたが最新の烈風三二型、紫電改三二型、陣風三二型によって難なく排除した後、攻撃隊によって少ない海軍戦力がさらに少なくなった。

そして一か八か出てきたイタリア艦隊に対して越後型の必殺の20インチ主砲が炸裂、最終的には一隻も残らず徹底的に艦隊を撃滅した。

その結果、両島の進行を阻むイタリア軍勢力は最早存在せず、さらに両島の守備隊の兵士の士気の低下も合いあまって、さほどの抵抗も無く占領できた。

1944年2月、たび重なる爆撃に戦況の悪化によって現政権への不満がついに爆発した。そしてベニト・ムッソリーニをクーデターで逮捕、幽閉させ、代わりに政権を握ったのは非戦派のピエトロ・バドリオだった。

彼は取り敢えず英仏独の三カ国に対して停戦を提案し、三カ国もこれを承諾。かれに日中米の代表を呼んでの講和会議が開かれた。そして暫定的にパリ講和条約が締結。条約締結の後イタリアは中立宣言を宣言した。

これによって戦争の構想が六カ国軍事同盟対ソ連…いや世界対ソ連と言う構想となった。

米英仏独陸軍は圧倒的な物量を武器にソ連の首都モスクワへの侵攻を、同時に極東方面から日中満陸軍がバイカル湖から東へと侵攻を開始した。

対するソ連軍は根こそぎ集めた兵士や戦車、航空機で対抗したが錬度が未熟なうえに物量戦では圧倒的にソ連に分が悪かった。さらにソ連重爆撃機隊もドイツのメッサーシュミットMe 262やイギリスのミーティア、アメリカのP-80そして日本軍の火龍一型や橘花等のジェット機部隊によって護衛機共々殲滅させた。

無駄な犠牲を増やし、それによってスターリンの肅清が重なり只でさえ少ない優秀な士官や将校がいなくなり、これが負のスパイラルを招いていると言っても過言では無い。そのため無断で脱走する兵士や時には中隊規模で脱走する部隊も現れ始めた程だった。最早ソ連は風前のともしびびである。

1944年7月、米英仏独四カ国連合軍は遂にモスクワ、サンクトペテルブルク、スターリングラードを占領。その際、モスクワでは脱出しようとしていたスターリンは幕僚共々爆撃で死亡してしまつた。これにより反スターリン派がクーデターを起こし、抗戦派を徹底的に逮捕、投獄させた。

そして1944年8月15日、大日本帝国首都東京において六カ国軍事同盟とソ連新政権との間で講和条約、東京講和条約が締結。こうして世界を巻き込んだ第二次世界大戦は幕を閉じたのであった。

第三話 別世界への転生（後書き）

ご意見・ご感想をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2342z/>

新生大日本帝国大戦記

2011年12月11日09時47分発行